

日の丸が裁がれる

「たった三五〇〇円の布」を焼いた波紋は、 天皇制を直撃している。

二月十一日、千駄ヶ谷区民会館において、「知花（ちばな）裁判支援・『紀元節』に反対する2・11講演集会」が、三百八十名の参加をもって成功裡に勝ちとられた。動労千葉は青年部十名が参加した。



知花裁判（「日の丸」焼きすて事件）支援

集会は、昨年の沖縄国体ソフトボール大会開会式において、「日の丸」を引きおろし、焼きすてた知花昌一さんの闘いをうけとめ、支援する立場で開催された。

この決起は大きな勇気と衝撃を与えた。この闘いによって「日の丸」とは何かがいま一度日本人々につきつけられた。イタリア・ドイツは、戦後、国旗・国歌をかえている。「日の丸」だけが、天皇の象徴―三千万人を虐殺したといわれる侵略の歴史の象徴として残っているのだ。

知花氏の決起に恐怖した右翼は、知花氏の経営するスーパーを襲撃し、読谷村にあるチビチリガマ（集団自決を強要されたほら穴）の碑を破壊するなどの天皇制暴力をほしいままにしている。「たった三五〇〇円の布」を焼いた波紋は、天皇制を直撃している。右翼の暴力、権力の弾圧に負けず、知花氏の闘いを支援するかどうかだが、戦争反対の闘いを本当に貫けるかどうかの現在の目安になっている。

三つの講演で、天皇制問題を学習

靖国問題と闘う牧師の森山恣さんは、「靖国神社は、天皇のもとに戦死者をまつている。つまり国のため、天皇のために死ぬことが前提化された、と

んでもないもの。政教合体が、戦争国家の実体であるから国家の宗教などつくってはいけない」とわかりやすく靖国問題を解説された。

高校教師で現場で闘っている高嶋伸欣さんは「政府が進めようとしている『国際化』とは外国の人と接するため必要なのは、国を愛し、日本の伝統・文化・民族性を知ること。天皇制認知であるというもので、国際化とは全然ちがう。社会科がなくなるうとして、いるが、この狙いは現実的、社会問題を、おおいにかくそうというもの」とまとめた。

沖縄反戦地主会会長の平安常次さんは「沖縄の反戦闘争は転換期に入っている。一方で、知花氏の決起と、他方社・共と労働組合の限界性と革マルのはたした役割。昨年の教訓を出発点にさらに闘う」と沖縄の現状報告をされた。

また、講演の前に、地域と教育現場で「日の丸」と闘っている仲間と北富士忍草母の会からの連帯のあいさつがなされた。

戦争の現実性が、もう始まっている！ 集会発言者の具体的内容からもこのことが十分理解できた。鉄道労連解体！ 全力で3・27三里塚へ！

参加集会2・11に反対する・紀元節支援・知花裁判

「分割・民営化」反対！三里塚二期工事阻止！

「紀元節」の復活許すな

一九六六年から「建国記念の日」が設定され、天皇制支配の強化を狙う「紀元節」が事実上復活した。

二月十一日というのは、神武天皇即位の日を根拠にして一八七二年（明治五年）に、設定したものである。しかし、神武天皇が一二七年も生きていたとするなど、神話をもとにした何の科学的根拠もないのである。

ここには、事実すらをもねじまげる天皇制暴力が示されている。